の枝を折り曲げた。なぜそうするのか息子は不思議に思いながらも別に気にも止めなかった。

やっと山の上へ着いて老母を下し、帰ろうとする息子を老母は呼び止めて「これ、息子よ、もう日が暮れかかっているし、お前達が帰る時、道に迷わないように木の枝を折っておいたから、それを目じるしに帰りなさいよ。」といった。息子は最後まで子供のことを思ってくれる母を捨てた苦しさ、辛さを胸に抱きながら山を下りた。その途中、孫が父に向かって「今度は私達のお母さんを連れて又この山に捨てに行かねばなりませんね」といった。父はこれを聞くやいなや、一目散に山へ戻り、老母を背負って連れ帰った。そして人にわからぬようにかくまっていたが、誰いうとなくそれが知れて、ついに役人の耳に入った。役所に引き立てられた父は事の次第をありのままに申し立てた。それ以後この村ではおば捨ての風習が止まったという。

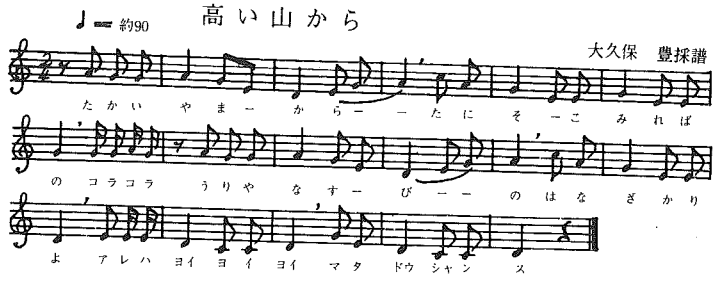
14　お釈迦さまのお見舞

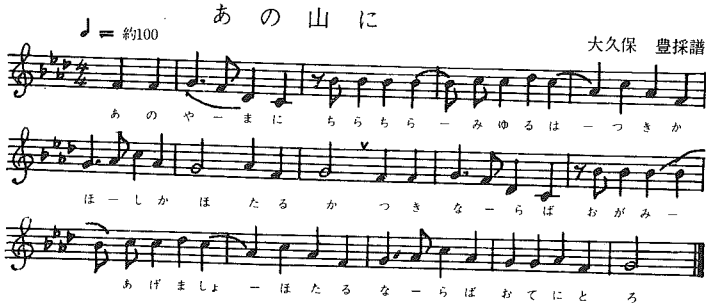
お釈迦さまの病気が重いと聞いて、世界中の鳥や獣や虫達がお見舞いにやって来た。雀は何のおしゃれもせずに、なりふり構わないで真先にかけつけた。お釈迦さまは大変喜んで「お前はなりふり構わず真先にかけつけてくれたから、人間と同じ米を食べてよい」と言われた。それから雀は米を食うようになった。つばめはびんつけ、かねつけしていたので遅れてしまい、得意の物凄い早さで飛んで行ったけれども、お釈迦さまは「お前はおしゃれをして遅れたので虫でも食べなさい」と言われた。みみずもがんばったが大変遅れたので「お前はドロでも食べなさい」といわれた。蛇ものろのろとはってきたので、みみ

ずよりは早かったが大変遅れた。そこで蛇は遠慮がちに「私は何を食べたらいいでしょうか」と尋ねると、先に来ていた蛙が「お前は大変遅れたではないか、つべこべ言わずにおれの尻でもくらえ」と大声で言った。それから蛇は蛙を追っかけて食うようになった。

四　民謡・童唄その他

民謡や童唄などは我々の心の故里である。民謡という語が日本で一般に使用されたのは明治末期からで、それ以前は俗謡とか俚謡とか言っていた。佐賀県には全国的に知られた民謡等は極めて少なく、我が大和町にも独得のものは見られないようである。以下昭和初期ごろまでこの辺で歌いつがれていたものの中から幾つかを拾って見よう。





◉高い山から谷底見れば
　瓜やなすびの花ざかり

詞「島に流され俊寛様はのー　沖の小松のうらめしや　ただ手をあげて船や船
小松重盛が仰せじゃとて　その俊寛を鬼界ヶ島に流されし　戻せ帰せと」。

あとの詞はこの「高い山から」を舞踊として振付けた時付け加えられたそうである。「高い山から」というのは、今、尼寺の長谷寺に静かに眠っている横尾紫洋（歴史篇参照）の作詞によるものであるが、作曲者は不明である。三味線で大正時代から昭和の始めごろは歌曲よりもむしろ舞踊として親しまれ、特に舞踊の入門として主に子どもが習っていた。前掲の楽譜は上戸田の吉富松蔵氏に歌ってもらい採譜したものである。

◉　あの山にちらちら見ゆるは　月か星かほたるか
　月ならば拝み上げましょ　ほたるならばお手にとろ

◉　天竺の天の川原に赤いジンギリジンが流れた　そのジンギリジンな
　七夕さんのよもぎか　又はいんきゃーさんの越中ふんどしか

これは新童唄といわれるもので、佐賀郡一帯に歌われていたようである。これは古くから日本中で歌われていた「あの山の光りものは、月か宝珠かほたるか、月ならばおがみましょか、ほたるならば手にとり、手にとり、手にとりてふくろに入れて、不動さまのおみあかし、おみあかし」という「あの山の」

の日本民謡が佐賀に来て変形したものと思われる。これも踊りが付けられ踊りの初歩的なものとして子どもの間で盛んに踊られた。これは浮立の道行き歌の一節ともいわれている。同じく吉富松蔵氏が口誦されたものを採譜したものである。

◉　都渡城とうばし川上鮎なます　すうざ（惣座）のいで餅出羽まんじゅう
　久池井　北原ひざこきわり　尼寺国分のうずらのはんみゃあ（飯米）
　玉林寺の鐘がごーん

これは意味がわかりかねるが、古老の話によればこれは歌ではなく、子どもたちが喧嘩して別れぎわにこの文句を高く叫ぶようにいっていたということである。そうだとすればこの文句に対する「やり返し」の文句があるのが普通であるがそれはのこっていない。

◉　長持唄

たんす長持唄ともいっているが、これは長持唄といって宮城県に起こった民謡で、追分節の一種であるがやがて日本中に流行するようになった。各地方によって多少の違いはあるが佐賀県内は大体同じ節回しである。この長持唄は門出の唄、道中の唄（道行き唄ともいう）、座敷祝い唄、到着、受け渡し、受け取りの唄等に分かれている。たんす長持の行列が村々を通ると、村の人々は列を止めこの長持唄を「所望々々」の声をかけて歌わせ、自分たちも歌ってにぎやかな歌合戦が始まり、なかなか部落を通り抜けることができなかった。

（門出の唄）

● さらば立ちます御両親様よ　ながのお世話になりました
● わたしゃたちます兄嫁様よ　あとはよろしく頼みます
● さらばおさらば皆様さらば　二度と来る時ぁ客で来る
● 蝶よ花よと育てしむすめ　末は他人の手に渡る
● 今宵別れていつまた会える　会うは三つ目か初あるき

（道中の唄）

● ここはこの地の関所でござる　唄を歌わにゃ通しゃせぬ
● 関所番所は昔のことよ　今は寝て越す汽車で越す
● 娘島田に蝶々がとまる　とまるはずだよ花じゃもの
● 銀のかんざし伊達にはささぬ　島田くずしの止めにさす
● 所望じゃ所望じゃと呼び止められて　唄のふしぶしたのみます

（受け渡し・受け取りの唄）

● たんす長持ぁお渡しますぞ　よろしく頼むぞ御主人様よ
● たんす長持受け取るからは　二度と再び返しゃせぬ
● たんす長持ぁ七棹八棹　中の御衣裳は綾錦

● 潮は満ちくる船走り込む　たんす長持ぁ荷ない込む
● 槍はなげしに刀はさやに　たんす長持ぁ寝床に収め

（座敷祝い唄）

● こなた座敷は祝いの御座所　鶴と亀とが舞い遊ぶ
● わたしゃ十八あなたは二十　ともに白髪の生えるまで
● 祝いめでたの若松様よ　枝も栄えて葉も茂る
● 届け届けと末まで届け　末は鶴亀五葉の松
● 金の巻樽黄金のひしゃく　庭にゃ泉の御酒を汲む
● 野にも山にも子は持ち置きゃれ　万の倉より子が宝
● きじの親鳥小松の下で　ひなを育てて千代々々と
● 今日は日もよし天気もよいし　結び合わせて縁となる
● めでためでたの重なる時は　天の岩戸も押し開く
● 故郷恋しと思うな娘　故郷当座の仮の宿
● めでた嬉しや思うことかのうた　庭に鶴亀舞い遊ぶ

◉ 子守唄

「ねんねんころりよ　おころりよ　坊やはよい子だねんねしな　坊やのお守りはどこへ行った　あの

山越えて里へ行った　里のみやげに何もらった　でんでん太鼓にしょうの笛」という子守唄は全国的に歌われているが、県内でも同一のものが地方によって歌詞が少しずつ変わっているようである。これらの子守唄は一定のメロディーがあるというものではなく、赤ん坊をあやすためにリズミカルに歌うものが多い。以下の子守唄は佐賀市郡共通のものである。（　）内は註釈）

● しっちょこはっちょこはっちょんさん（「はっちょんさん」の部分は「蜂の巣」とか「ねんしゃいよ」というところもある）

はよ　ねんねしんしゃいよ（この句をいわない地方もある）
はっちょんさんなぁ（又は蜂ぁ山ぁ）巣作いぎゃあ（巣を作りに）
巣は作らじ嫁ご見ぎゃ（巣は作らないで嫁を見に）
嫁ごはどぎゃな嫁ごかん（嫁はどんな嫁か）
びんつけかねつけよか嫁ご（「びん」は髪の油、「かね」はお歯黒をつけ歯を黒くすること）
朝見たれば（あしてゃあなれば）化け嫁ご
はよねんしゃい　ねんしゃいよ

● お月さんいくつ　十三七つ
七つの年から京に上せて学問させた
七どん八どん源八どん

さりいて（歩き回って）喧嘩してくいやんな（喧嘩してくれるな）
浮立のくっけんままたきやい（ご飯をたきなさい）
おりゃ（自分は）飯ぁ　スッカンカン

● かんかんかごじゃ上らんか　上ろう支度はしたれども
あんまりかめ女（又はあの女）が泣く故に　かめ女泣かすな土産くりゅう（土産をやろう）
かめ女のみやげは何々か　一で香箱二で鏡三で薩摩の板買うて
板屋葺きして門立てて　門のぐるり（周囲）に杉植えて
杉の緑に鷹すえて　鷹の羽こに香たいて
香のけむりは西東　西と東に鳴く鳥は
雁かすいしょか鵜の鳥か　鳴いてみたれば※朝鮮鳥
朝鮮鳥の姉さんたちゃ　髪をけずって化粧して
観音さんにみゃあらした（お参りした）　おどまあ何着てみゃあろうか
笹色のべんべ（着物）着て桃色の帯して　しゃらいしゃらいとみゃあろうか
裏の金剛橋やどぎゃんして（どうして）渡ろうか
雪駄お手に持ってしゃらいしゃらい　みゃあろうか

※ 大託間あたりでは五位鷺のことを「ちょうひんどい」とか「ちょうへんどい」とかいうそう

でまたこれは「あまのじゃく」という意味もあるという。久保田あたりでは勝烏のことを朝鮮どいともいうそうである。勝烏は豊臣秀吉が朝鮮遠征の時、朝鮮より連れてきたと伝えられている。

●やんやん山伏が
家の茶の木に雀が三羽止った
うすべり三枚ござ三枚
金らんどんすを縫わせたら
何も悲しくないけれど
金があるやら何やらと
三年三月の九日に
千松死んだと書いてある
ちゃんちゃん茶袋おばさんに
向こうの山に塔建てて
鈴がちゃんちゃん鳴る時は

◎　お手玉のうた

山田の紺屋に昼寝して
先の雀はものいわず
合わせて六枚すきたてて
はおろはおろと裏に出て
わしが弟　千松は
一年待っても状がこぬ
向こうの山から状がきた
長い脇差　父さんに
櫛とこうがい姉さんに
塔のぐるりに杉植えて
じいさんばあさんみゃあらんせ

昼寝の夢に何を見た
中の雀がいうことにゃ
よんべ呼んだ花嫁に
何か悲しと泣きなさる
七つ八つから金山に
二年待っても状がこぬ
状の裏手を読んだれば
短かい脇差　兄さんに
わしが十五になる時は
杉の小枝に鈴さげて

お手玉のことを「おさら」ともいう。赤、青、黄等きれいな着物等のはぎれで直径三糎、長さ五糎くらいの袋状の中に豆とか砂粒等を入れて縫い合わせて作り、動作に合わせながら歌を歌ってゲームをするものである。お手玉は室内で座ってするものと、戸外で片手や両手を使ってあやとりをするなどいろいろな遊び方が考えられている。

●おさら　おさら
おみっつおろしておさら
おはさみおろしておさら
おてぶしおてぶし
おひじたたいておさら
おそでおそで
大きな橋くぐらんせ

おひとつおろしておさら
おみんなおろしておさら
おちりんこおろしておさら
おてぶしおろしておさら
おてばいおてばい
おそでおろしておさら

おふたつおろしておさら
お手のせおろしておさら
お左お左　だるまの目
おかにおかに
おてばいたたいておさら
小さな橋くぐらんせ

●おんどり一羽が一匁
（くぐったーん　一かんしょ）
おんどり二羽が二匁（以下十匁まで続ける）

●道をはさんで畑一面に　麦は穂が出る菜は花盛り　眠る蝶々に飛び立つひばり

◎　羽根つきうた

●ひいふくれたおんみいさん
ひいらいらいごんぼうらいらい
ひいふくれた松の木に

朝から晩まで頭巾かぶっておむすび十
三日月さんに着いたなら　そこで二十
雀が一羽とまった　そこで三十

ひいふくれた官員さん　朝から晩まで高帽子かぶって　そこで四十
ひいふくれた朝日かげ　朝日ににおう山桜　そこで五十
ひいふくれた伊勢えびは　年もとらずに腰曲り(又はお酒も飲まずに赤くなる)そこで六十
ひうふくれた七福神　七人そろって踊りのけいこ　そこで七十
ひいふくれたロシャ人は　朝から晩まで負けどおし　そこで八十
ひいふくれた日本人　朝から晩まで勝ちどおし　そこで九十
ひいふくれた鶴亀は　千年万年生きている　そこで百

●ひいふう三つのうぐいすは　人も通らぬ山道を　通れ通れとせっかくに
桜の花が咲きこぼれ　一枝折ってはお手に持ち　二枝折って腰にさし
三枝折るまに日が暮れた　ばっきいさんがちゃ泊ろうか　おんじいさんがちゃ泊ろうか
泊ってみたれば　ふとんは短し夜は長し　座敷の雨戸をあけてみたれば
十七八のねえさんが　ぴっちゃんはっちゃん機織んしゃる
あぜの織いみちゃ知っとっかん　今忘れた　今おぼえた
トコトン　ヤレトン　そこで一かんつきました
●ひいふくれたおんみいさん　柳町の八兵衛さん　今にゃあ一晩泊らんかん
※ねばい饅頭食わすっけん　いくら食うかん　三つ食う

三つも食うぎい腹ん痛か　ふたぁつばっかい食うときやい
※ねばい饅頭はねばりのある米の粉で作った饅頭の意か。所によっては「ねまい饅頭」ともいうが
これは腐った饅頭の意になる。

◉　手合わせうた

●一で橘な二でかきつばたね　三でさがり藤　四で獅子牡丹ね　五つ今山の千本桜ね
六つ紫色よく染めてね　七つ南天　八つ八重桜　九つ小梅にちらしをつけてね
十お殿様ぎょうえの御紋ね　十一天下のあおいの御紋ね　十二仁王さんにお茶湯上げてね
お茶は新茶の出花でござるね　十三讃岐の金比羅様よね　十四信濃の善光寺様よね
十五極楽花園山よね　十六ろくた庄の氏神様よね　十七七夕たなばた様よね
十八八田の淡島様よね　十九久留米のあまごぜ様よね　二十仁比山の山王様よね
山王さんのお猿さん　赤いおべべが大お好き　テテシャン　テテシャン

●青山御所から東山見ればね　見ればね　門の外からお小夜と書いてある　書いてある
お小夜さしすせ水晶の櫛をね　櫛をね　誰にもろたか源次郎男にもろたかね　もろたかね
源次郎男は伊達者で困るね　困るね　伊達者にぺこぺこ七月八月
そこでお小夜さんが涙をぽろぽろ　ぽろぽろ　落ちる涙を袂で拭いましょ　拭いましょ
拭った袂を洗いましょ　洗いましょ　洗った着物を干しましょ　干しましょ

干した着物をたたみましょ　たたみましょ　たたんだ着物をなおしましょ　なおしましょ
なおした着物をねずみがちゅうちゅう

※二人が向き合ってお互いに相手の手のひらを打ちながら歌う。

◉　まりつきうた

●ぼんさんぼんさんどこへ行く　親もおらずに子も持たず　たった一人のぼんさんが
山から下ってきょう町へ　何かと思えば四十九日　四十九日が来たならば
お客そろえてまいります　信玄袋にお豆がござる　人がちょいと見りゃちょいと
かくす

●山の金ちゃんなぜ泣くの　親もおらずに子もおらず　たった一人の坊さんが
山からころげて四十九日　九日といえが今日七日　豆腐の味噌汁お豆でござる
人がちょいとくりゃちょいとかくせ

◉　指遊びのうた

●一けんじょ　二けんじょ　三げんじょ　四けんじょ　しこまのもといで物食わん鳥は
ちいちが千鳥　まささが花を　つぼんだか咲いたか　げげのげんぐるまで
きゅっというて死んだ

●一がさした　二がさした　三がさした　四がさした　五がさした　六がさした　七がさした

八（蜂）がさした　九まばち（熊蜂）んさした

※これは相手の手の甲をかわるがわるつねり、八の時や九の時は強くつねるのである。

◉　子どものあやしうた

●ちょうしちょうしいんぼいぼい（ちゅうしちゅうしとか、ちょうちちょうちとかいう所もある）
たんぐい　たんぐい　ばっきゃ

（これは赤ん坊が座るようになるころ、親は子どもの両手を片手ずつ握りこの文句を歌いながら右手の人指し指を左手の掌にねり込むような動作をさせ子どもを喜ばせるが、これはまた子どもの手が器用になるためにさせるものともいわれている）

◉　縄とびうた

●波はどんどと打ち寄せて　ここは海辺の山の上
青空高くそびえたち　にしきのみ旗が立っている

◉　遊びごっこのうた

●ぜんじゃら　ぼうじゃら　お茶屋に任せて　そこひけぽい

※遊び仲間の親になった者が片手を出し掌を広げると、他の者はこれに人指し指を立てる。そしてこの文句を歌いながら最後の「ぽい」の時、親から握られないようにすばやく指を引くが、引きそこなって指を握られた者が鬼になる。「ぽい」がいわれぬ前に早く指を引く者があれ

ばそれが鬼になり、鬼がきまるまで繰返す。

●名あて

お月さん　お月さん　　なし（なぜ）星ぁ出さっさん　　十五夜さんから憎まれぼうで
そこで星ぁ出さっさん　　何やろかやろ　　池のはたの子ふくろ子ふくろ
うしろへおんもん（いる者）だーいしょ（だれだろうか）　ちりんからんぼとっ

●兎の子とり

今日は日のよか兎の子とろ　　親が死んだこんな（死んだら）子はだれーくりゅう（誰にやろうか）　おれーくいやい（私にください）　といゆっこんなぁ　とってみやい（とれるならとってみなさい）

◉　その他

童唄とはいえないかも知れないが一種のリズムを持ち、普段の話し言葉とは趣を異にするものがある。

「呼びかけ」ともいえるものだろうか。初夏の宵には菜種がらでほうきを作り「ほ、ほ、螢こい。あっちの水ぁ苦いぞ　　こっちの水ぁ甘いぞ、ほ、ほ、螢こい」といいながら螢を追っかけた。秋から冬にかけてたくさんの烏がたんぼにおりたり、時には物凄い羽音をたてて急降下することもある。そして烏たちは太陽が西に沈むころ三々五々山のねぐらさして帰りを急ぐ。その烏たちにも

子どもたちは友だちとして親しみ呼びかけたものである。

●からすからす勘三郎　　わが家の榎ぁつんむえよっ　　早ういたて水かけろ

●からすがやでー（宿へ）火のちいた　　一本橋ぁつんむえよっ　　早ういたて水かけろ

また、池や堤に浮いている「かいつぶり」（きゃあつぐろという）を見ても呼びかけた。

●きゃあつぐろの頭ぁ火のちいた　　ぶるっとすんで（もぐって）じき消えた

そして石垣の間から「どんこ」が顔を出しているのを見ては

●石垣どんぽう面出すな　　面出しゃ釣らるっ　　わが損たい

※「石垣どんぽう面出すな」ははにかみやの子どもをからかう時にもいう。

今までいっしょに遊んでいた友だちとも夕方になると別れねばならないが、

●もどろ　もどろ　桃の葉　　かえろ　かえろ　柿の葉

と高く叫びながら帰ったり、また、片足とび（すっけんぎょという）をしながら

●すっけんぎょはどこまで　お医者さんのかどまで

●すっけんぎょはどこまで　庄屋さんのかどまで

とうたいながら、家へ早く帰る競走をした。また、おはじき遊び、つばめ起こし、むくろあてなどをしてたくさんの数を数える時は二、四、六、八、十などとはいわないで

●大　阪　長　崎　行きゃ　らば　言　付け　しゅか　にん十（二十）

●つう　つう　たこ　きゃあ　十

と二十や十を単位とした数え方もした。むくろあてをする時は、相手のむくろによくあたるようにと

●よかば（良い場）きんきん向けやいの　向けたところでいいやいの

ということばを唱えながらこつんとあてていた。七月から八九月にかけて稲の葉が青く栄えるころになると、とうばた（たこ）をあげて次のような歌を歌いながら遊んだ。

●とうばた　あんがれ　あんがれ　西風吹け吹け　糸とるでっちょん（弟子）　足もとよろよろ
　やっこさんのお尻は　寒ざらし

いかにも佐賀んもんらしい歌に次のようなのがある。

●佐賀で名物ぁ　にゃあごとこっきゃあ（何事をいうか）　こんつくしょう（この畜生）にあら
　いやばんた　どうしゅうか　ぞうたん（冗談またはざれごと）しござんな（するな）

●佐賀で名物ぁ　ウチキー　ノンキー　玉ノンキーに　片田江のアンチン焼（たいやきなど）
　土橋のへこはずし（へこはずしは、ふんどしをはずしたままでも、あるいはふんどしを質に入れてでも食わずにはおられぬほどおいしいオコシのこと）

●佐賀の言葉の出の荒さ　何てこっきゃあ（いうか）　あんちくしょうに
　あらこなたの　そくしゃあか（憎らしい）　ほんにぞうたんしんさんな

熊本県民謡の「田原坂」の節を借りて次のように声高らかに歌った。

●拙者元来　鍋島育ち　豪毅朴訥ありのまま
●武骨者でも鍋島育ち　かめばかむほど味がある

大正時代から昭和の始めごろまでは小学校でも郡の運動会があり、また各校区での青年団の運動会もなかなか盛んで、太鼓や鐘を打ち鳴らし、色とりどりの旗を振り回して花々しい応援合戦を展開した。

●淀姫神社の神主が　おみくじひいて申すには　いつも〇〇ぁ勝ち勝ち勝ち勝ち
とやればまた、相手の方から返し歌がくる。

●もしも〇〇勝ったなら　電信柱に花が咲く　いつも〇〇ぁ負け負け負け負け

尻取り遊びは全国的にあるが、県内では主に次のようなものが共通して唱えられた。

●日本の　乃木さんが　凱旋す　すずめ　目白　ロシヤ　（以下省略）

●一角二角、三角四角　四角は豆腐　豆腐は白い　白いは兎　兎ははねる　はねるはびっきい（蛙）
　びっきいは青い　青いはバナナ　バナナは長い　長いは煙突　煙突ぁ黒い　黒いは印度人　印度人
　は強い　強いは兵隊　兵隊はえらい　えらいは大将

早口言葉としては「生麦、生米、生卵」とか「赤ばかま、黄ばかま、茶ばかま」とかのように全国共通と思われるものが多く、この辺のものとしては次のようなものがある。

●どじょう　にょろによろ　子にょろにょろ

昭和十年ごろ作られた現代的佐賀民謡として次のようなものがある。

● 佐賀行進曲

1 水は川上桜は神野　夏は多布施の舟遊び　ふっと見そめた娘の肩に
にくや蛍がとんでくる
2 映る灯影はえご端通り　恋の今宿宵の口　三味や太鼓のあのさざめきも
更くればまるいお月さま

● 葉隠行進曲

1 薫る樟の木葉陰の庵に　偲ぶ老士の尊い教え　道を開きし四誓願
今も受け継ぐ佐賀藩論語　見よや葉隠れ教えは高し
2 祀る祖先は松原神社　割って見せたや鍋島気質　負けじ魂熱と意気
鍛えうけつぐ武士気性　見よや葉隠れ我等の意気を

● 佐賀小唄

1 花は神野か多布施の堤　舟で遊ぼか芝生に寝よか　桜木に咲く水に咲く
サッサイヤサカ水に咲く
2 ともる鈴蘭白山通り　誰か待つよな元町行けば　ジャズが身に泌むしみじみと
サッサイヤサカしみじみと

● 佐賀はよいとこ

1 佐賀はよいとこ城下町　楠の若葉もそよそよと　エー暮れりゃ白山人通り
ともる鈴蘭花の町　ほんによかないよかところ
2 水郷川上夕涼み　紅い雪洞屋形船　エー浮いて流れりゃ神野のお茶屋
水に蛍が身を焦す　ほんによかないよかところ

● 石棒つき唄　（大久保　野田寅吉氏口述　明治二十四年十二月五日生）

○ サラサ節　（つき手の掛け声ヤーサラサラヤーサラサは㋩で、ドッコイは㋧と略記）

ヘヨー始めたその日が吉日じゃ　㋩　どなた様でもどなたでも　㋧、㋩　御苦労さんでござります　㋩
お亭主様のお頼みに　㋧、㋩、けがあやまちも無いように　㋩　いごとまごともないように　㋧、㋩
そもそも石棒の始まりは　㋩　伊勢てんしょうこう天照らす　㋧、㋩　天照らすおん神の　㋩
上宮下宮のみ社の　㋧、㋩　その時始めたサラサ節　㋩　四方に立てたるこの柱　㋧、㋩
世界を広むる形なり　㋩　中に立てたる堂づきは　㋧、㋩　大日如来とたてまつる　㋩
おのおの方を見給えば　㋧、㋩　十六羅漢さんの形なり　㋩　おのおの方のひく綱は　㋧、㋩
大日如来の善の綱　㋩　上にあげたるこの櫓　㋧、㋩　まる四天とあがめたる　㋩
わたしが持ったるこの紙は　㋧、㋩　梵天神と申します　㋩　上にあげたるこの笹は　㋧、㋩
松竹梅とも見えにける　㋩

〈聖徳太子という人は ㋕ 十二やほんの柱をば ㋔、㋕ 十二一度にけずりあげ ㋕
たる木こまいを見給えば ㋔、㋕ 皆金銀で作りあげ ㋕ なげしと天井のじんじょさや ㋔、㋕
棟木あたりを眺むれば ㋕ 皆金銀を打ち延べて ㋔、㋕ 八万四千の釘のかず ㋕
あいまあいまに打ち込んで ㋔、㋕ 葺草辺りを眺むれば ㋕ 萬小鳥の羽を集め ㋔、㋕
〈こなたの社の谷々に ㋕ 鶴の巣籠巣をかけて ㋔、㋕ 十二の卵を産みそろえ ㋕
十二一度に目を開ける ㋔、㋕ 羽根打ちたたいて飛ぶ時は ㋕ 金の盃くわえくる ㋔、㋕
長柄の銚子もそのごとく ㋕ 申することは限りなし ㋔、㋕
〈金の大黒さんを拵えて ㋕ 大黒さんの役目には ㋔、㋕ 朝の間にても千たわら ㋕
昼の間にても千たわら ㋕ 夜の間にても千たわら ㋔、㋕ 三千石のおんたわら ㋕
ひょう口揃えて積み込んだ ㋔、㋕ こなたの社にこぎつける ㋕
〈高砂の、高砂の、サーエンヤラヤ 尾上の松で臼をくる サーエンヤラヤ
その枝々で杵作り サーエンヤラヤ 餅つく時こそめでたかりける エーヨーサンノ、サーエンヤラヤ
〈北山時雨 雨は降るとも、いとやせぬ ソイジャ ヨイヨイ ヨイノヨイノヨイ
降るとも雨は、雨はナー くもり無ければ晴れてゆく
あとはめでたき今日の月 アーリャ アーリャ アリガタヤ

有明の月を サッサ 眺めて勇み立つ ソイジャヨイヨイ ヨイノヨイ
〈乾の隅というつぼは ㋕ 七福神のいどころじゃ ㋔、㋕ 乾の隅に鐘鳴らす ㋕
鐘のぐるりによし植えて ㋔、㋕ 人よし我よし世界よし ㋕ 神は乾で上らすぞ ㋔、㋕

○ 本 節（那須与一）

〈ヨー、国を、ア、チョイト、申さば下野の国 ア、ヨイヤヨイ
功名功名は世に多けれど コリャヨーイヨーイヨーイヤニャ、ウントコドスコイ
ドスコイドスコイ ウントコドッコイセー
那須の ア、チョイト 与一というさむらいは ア、ヨイヤヨイ
御歳積れば十九才なるが コリャヨーイ（以下前と同じ）
せいは ア、チョイト 小兵で御座候えど ア、ヨイヤヨイ
日本一なる弓取りなるぞ コリャヨーイ（〃）
矢をば ア、チョイト 一手に名は末代と ア、ヨイヤヨイ
残し置かれしところはいずこ コリャヨーイ（〃）
四国 ア、チョイト 讃岐の屋島の沖で ア、ヨイヤヨイ
的の扇を立てさせあるを コリャヨーイ（〃）
九郎 ア、チョイト 判官これご覧じて ア、ヨイヤヨイ

与一与一と御前に呼ばれ　コリャヨーイ（〃）
与一　ア、チョイト　御前に早やかしこまる　ア、ヨイヤヨイ
与一よう聞け大事なことよ　コリャヨーイ（〃）
平家　ア、チョイト　方なる沖なる舟に　ア、ヨイヤヨイ
的の扇を立てさせあるを　コリャヨーイ（〃）
あれを　ア、チョイト　一矢に射落すなれば　ア、ヨイヤヨイ
まんごう末代世に名を残す　コリャヨーイ（〃）
与一　ア、チョイト　心に覚しめあれば　ア、ヨイヤヨイ
望むところに仰せが下がる　コリャヨーイ（〃）
お受け　ア、チョイト　申して御前を下がる　ア、ヨイヤヨイ
与一その日の出装束は　コリャヨーイ（〃）
下に　ア、チョイト　赤地の直垂召して　ア、ヨイヤヨイ
黒革威の鎧を着し　コリャヨーイ（〃）
駒は　ア、チョイト　連銭葦毛の駒よ　ア、ヨイヤヨイ
鐙手綱は妙珍細工　コリャヨーイ（〃）
小松　ア、チョイト　原をばざんぶと乗りて　ア、ヨイヤヨイ

はるか向こうを見渡しければ　コリャヨーイ（〃）
風も　ア、チョイト激しく波高ければ　ア、ヨイヤヨイ
与一八幡申し子なれば　コリャヨーイ（〃）
南無や　ア、チョイト　那須野の明神様よ　ア、ヨイヤヨイ
今度一矢は射らさせ給え　コリャヨーイ（〃）
念ずる　ア、チョイト　間もなく新たなことよ　ア、ヨイヤヨイ
風もおだやか波静まれば　コリャヨーイ（〃）　たがいア、チョイト　矢筈を番え　ア、ヨイヤヨイ
ねらむところは扇の要　コリャヨーイ（〃）
詞へ要際をばぷっつといぎり、いぎりし扇は敵や味方や見物人の　そのまん中に　ひらりひらりと
落ちてくる（この時日の丸をかいた扇をつき込む）ばのーヨーイヤエー　ソレソレ　アーレハシタ　ヨイトコニャ
沖の平家は舟板たたく　陸の源氏は手びらを鳴らす　よいや与一と一度にどっと　ヨーイヤエー
ソレソレ　アーレハシタ　ヨイトコニャ
すぐに与一に五万石を給わるは　ヨーイヤエー　ソレソレ　アーレハシタ　ヨイコトニャ
鶴は千年じゃ　ホー　鶴は千年亀は万年、こなたのお家はまんご末代　孫子の末まで　動きなしば
の　ヨーイヤエー、ソレソレ　アーレハシタ　どなた様でも長々のご苦労でございましたぞ　ヨー

イヤエ　ソレソレ　アーレハシタ　今日はこれぎりエーヨーヤーでやむる場よ
どなた様でもやめまする　ソレ　ヤノヤーッサ　コレマカセ　ホーマカセ
サンヨーイ、サンヨーイ、ヨヨイのヨイ（三回繰返す）

五　俚諺

「一富士二鷹三茄子」といえば吉夢として全国的に知られている。このように日本では昔から全国津津浦々に至るまでいろいろな俚諺がある。今日までわかっている日本の俚諺では東北地方一帯が多く、東九州が少ないそうである。俚諺というのは「ことわざ」のことで昔からいいならわした言葉のことである。短い文章の表現の中に深い意味を持たせ、覚え易いように面白く工夫され、昔からずっといい伝えられて現在に至っているが、科学文明に押されて次第に忘れられているようである。しかしその俚諺の中には長い人生経験から生まれた科学的なもの、教訓的なものから占いとか迷信的なもので種々雑多であるが、その俚諺の中には毎日の生活の拠り所となるものも多く、長い人生の厳しさから生まれた文化遺産として捨て難いものもある。大和町は昔から農業を中心にした経済生活を営んでおり、その農業は天候に影響されることが極めて多く、毎日のあいさつでも「今日はよか天気なんたぁ」とか「ほんにむうらしかのまい」といい交わされるように、先ず天気を気にしているようである。事実天候の如何に

よって豊作になったり凶作になったりするので当然のことであり、したがって天候に関する俚諺も多いわけである。そしてこの天候に関する俚諺は現在の科学的な天気予報の面からも正しいと立証されるものが多く現在でも通用するといわれている。以下一部を掲げるがその科学的解説は早水逸雲・吉村寿一氏共著の「佐賀県の気象と天気の諺」によるものである。

1　天候に関するもの

● 北風と賃取りは日のうち

冬の季節風は大陸高気圧の張り出しによって吹き続くもので、九州では主に北西の風向きになるが、等圧線の形や地形によっては北風の所もあれば西風になる所もある。この風は日の出後に吹き始め、日没に止むのが普通だから、日雇賃取の日中労働者と似ているということであろう。

● 冬の南風は雨

南風は所によって「はい」「はえ」といい、福岡、熊本、佐賀県では「はやのかぜ」、「はやんかぜ」という。冬季天気が安定するのは、大陸高気圧が張り出して日本全土を包むためで、一般に北西寄りの風になるが、南風になるのは冬型の気圧配置が崩れて、九州付近を低気圧が通過する時だから、寒さがゆるんで早晩雨になるとみてよいということである。

● いぬい（戌亥又は乾）の風は晴

いぬいは北西の方向で、この辺では天山からの吹きおろしになる。北西風は晩秋から春先までの主風で、一年を通じて好天の時である。冬の北西風は冷たい空っ風だから、かぜひきや火事に用心する風である。この風向きは夏や秋なら台風の通過後に吹きつのり、春先なら春雷の後に吹き出す突風の方向になる。とにかく低気圧や寒冷前線の通過後か高気圧の前面で吹き出すので、天気回復の常風ともいえるだろう。

● 線香の煙がまっすぐ上れば晴

煙がまっすぐ上るのは高気圧内での静かな晴れた日である。煙のなびき具合で風向きがわかるので、季節によっては天気予知も可能になろう。

● 北ごち三月

「ごち」は東風、北ごちは北東風のことで、天気が次第に崩れる時に吹き易く、この句は松梅地区辺りにいわれるもので、北東の風なら三月も同じような天気が続き易いという意味だろうか。

● 貝殻雲は長しけのもと

雲の呼び名は今日の気象観測では十種に限られているが、昔の分類では山雲、水雲、ひでり雲、雨雲の区別が代表的なもので、水雲はうろこ型、波状、まだら状、乳房状などがある